

10

緒方洪庵が武谷椋亭（祐之）に宛てた書簡 （安政4年12月20日）

中山 茂春

医療法人白翠園春日病院／久留米大学医学部非常勤講師（医学史）

緒方洪庵が適塾門下生である福岡藩医武谷椋亭（祐之）に宛てた書簡（安政4年12月20日）を紹介いたします。

武谷椋亭は九州大学医学部の淵源となった福岡藩医学校「養生館」の産みの親であり、福岡の歴史ならびに九大医の歴史に燦然と輝いている医師です。

天保14年（1843）に適塾に入門しています。適塾姓名録の署名637人（2組重複）の中で16人目の入門者であり、早期の門下生の1人です。帰藩後は藩主（黒田長溥）に医学校設立を進言、慶応3年（1867）に設立された福岡藩医学校「養生館」の初代頭取になっています。

緒方洪庵は、この武谷椋亭宛てに安政4（1857）年1月8日から文久2（1862）年12月25日まで6年間に21通の書簡を送っています。但し最後の文久2年12月25日の書簡は武谷椋亭と篠田正貞（適塾門下生）の2人宛てになっています。

今回紹介の書簡には「扶氏遺訓初帙併せて、薬方病丈が漸く上木に相成りに付き呈上候」とあります。扶氏経験遺訓は緒方洪庵がベルリン大学教授・フーフュランドの内科書のオランダ語訳本を、約20年の歳月をかけて訳したもので安政4年（1857）に刊行（全30巻）です。これを洪庵が武谷椋亭に贈っています。書簡には「校正も甚だ不行届、その上案文紙宜しからず、甚だ見苦しき本と相成り申し候、御覧の上、見附候事も候ば御存寄可被下候」とあります。又、「別に1本の篠田氏へ御届可被下候、御地近況如何相聞き」とあります。扶氏経験遺訓が武谷椋亭の元に書簡と共に2部届き、1部を篠田氏へ届けてくれとあります。これは福岡藩医篠田正貞の事ですが、適塾には安政3年8月20日に入門しています。書簡の中頃には、「御政事御改革に相成候」「当地にても美評有之候」と記されています。これは武谷椋亭が藩主に医学校の設立を進言した後、武谷椋亭の思い通りに医師養成ならびに医療行政の改革がうまく行きつつあるという情報が洪庵の元に持たせられているのが分かります。

この福岡藩の情報は、安政4年9月29日入門した、藤野良泰、塚本道甫、原田水山の3人によって持たせられたものと考えられます。

この3人は福岡から大阪まで一緒に旅をして、同日に入門しています。原田水山の事については、この書簡の冒頭、時候の挨拶の次に出てきますが「御舎弟水山子も御無事御出精」とあり、水山は武谷椋亭の末弟で、原田家に養子に行っている人物です。適塾姓名録の署名は原田水山とあります。

書簡の後半は、筑後久留米藩医松下元芳に関する記述です。松下元芳は福沢諭吉の一代前の適塾の塾頭をしています。福沢諭吉の福翁自伝の中の緒方の塾風の項に、福沢諭吉と松下元芳が大阪の夜店等と一緒に遊ぶエピソードの記述がある位2人は親しかったのですが、その松下元芳について洪庵は次のように記しています。

「久留米之松下君翼（元芳）当秋より帰国いたし候、同人は急度御役に相立候人物に御座候。何卒洋学之事に付御用之事も候はば同人へ御相談有之候而可宜と奉存候」

これは、洋学の事について相談したい事があれば、大阪までは遠くて時間がかかるので、急ぐ時は松下元芳に相談しなさいという内容です。

洪庵が松下元芳を自分の代役ができる程信頼し、高く評価していた事がうかがえます。筑後久留米藩史によれば、筑後久留米藩は慶応年間に英語学校創立を決定、松下元芳に英語を学ばせる為に慶応義塾へ遊学させています。福沢諭吉にとって松下は適塾の先輩（適頭）であり、賓客として待遇し、自ら懇切に教授したとあります（故に、慶應義塾姓名録には名前は無い）。又、明治元年の久留米藩の政変により英語学校が立ち消えになった事を知った福沢諭吉は松下元芳に上京を促したが、藩重役の反対で実行されなかったとあります。

このような内容の緒方洪庵の書簡をご覧にいれたいと思います。